「絵本の読み聞かせ」に関する一考察
― 学生の読み聞かせ体験の実態調査より ―

山 田　秀 江
四條畷学園短期大学

A Study of Read Aloud Picture Books

Hidemi Yamada
Shijonawate Gakuen Junior College

四條畷学園短期大学紀要　第 50 号　別刷
平成 29 年 12 月 25 日

原著

「絵本の読み聞かせ」に関する一考察
― 学生の読み聞かせ体験の実態調査より ―

山 田 秀 江*

A Study of Read Aloud Picture Books

Hidemi Yamada

本研究では、保育実習Ⅰ（保育所）に参加前の学生に、幼少の頃に家庭や保育施設で「絵本の読み聞かせ」をしてもらった体験があるかを問うたところ、７割以上の学生がその体験があると回答した。しかし、絵本の内容や思い出などを覚えている学生は２割程度と少なく、絵本の子どもに与える良い影響について理解が薄い学生が多いと分かった。さらに保育実習Ⅰの後に実習での「読み聞かせ体験」を問うたところ、９割以上の学生が行っていることが分かった。その感想として、子どもは絵本が大好きで、絵本から良い影響を受け、想像力や思考力などを養うことができると感じていることが分かった。それと同時に読み聞かせの難しさも感じていることが分かった。それらを踏まえ、養成校で「絵本の読み聞かせ」について、どのような指導を行うべきか検討した結果、次の４つの事柄が必要だと導き出された。１、絵本の魅力を深く味わう体験をする　２、絵本に対する知識を得る　３、読み聞かせの技術を身に付ける　４、絵本を子どもと一緒に楽しむ感性をもつ　これらの内容を学生が習得するための授業内容や指導法について関連する授業担当者が連携しながら、工夫し検討することが今後の課題である。

Key words:　絵本　読み聞かせ　育ってほしい子どもの姿　読み聞かせへの指導内容

１．問題と目的

幼稚園教育要領[1)]、保育所保育指針[2)]、幼保連携型認定こども園教育・保育要領[3)]が同時に改訂（改定）され、平成30年度より施行される。この改訂（改定）において大きく注目すべき点は､「幼児教育」に関してどの施設においても共通の『育みたい資質・能力及び「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」』の明記である。幼児教育において育みたい資質･能力の三つの柱を①「知識･技能の基礎」②「思考力･判断力･表現力等の基礎」③「学びに向かう力･人間性」とし、これらを踏まえつつ、五歳児修了までに育ってほしい具体的な姿を「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」として以下10の姿を記している。(「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を以下より「10の姿」と表示する」(1) 健康な心と身体　(2) 自立心　(3) 協同性　(4) 道徳性･規範意識の芽生え　(5) 社会生活との関わり　(6) 思考力の芽生え　(7) 自然との関わり・生命尊重　(8) 数量や図形、標識や文字などへの関心・態度　(9) 言葉による伝え合い　(10) 豊かな感性と表現

この「10の姿」は五歳児だけでなく、三、四歳児の保育の中でも念頭に置きながら指導を行うこととしている。さらに、この「10の姿」を五歳児後半の評価の手立てとするよう明記されている。そして、小学校教員も入学直前の子どもの姿として理解することにより、幼児教育と小学校教育との連携の強化を期待されている。しかし、この「10の姿」を到達目標にしているわけではない。五歳児後半の子どもの姿を当てはめて、到達できていないと保育者が評価した場合、その力を付けるための、保育者主導の子どもにさせる保育になってはいけない。「10の姿」のように育っていくよう、子どもの主体性を大事にしながら遊びを通して総合的に指導することが重要である。

では、この「10の姿」をどのような保育内容や

＊　四條畷学園短期大学　保育学科

保育方法で育てていけばよいのであろうか。それについては各施設が工夫し、実践していくことが求められているが、何か突飛な新しいことをするのではなく、これまでの実践を振り返り、具体的な保育内容について、よく吟味し計画的に実践していくことが重要であると考えられる。

そこで、本研究では、この「10の姿」を育てる一つの有効な保育教材として絵本を取り上げる。

絵本は0歳児から就学前の時期まで、家庭や幼稚園・保育所・こども園などの保育施設で読み聞かせをしてもらい、子どもにとって馴染みのある大好きな教材であろう。絵本の教育的価値は高く、読み聞かせを行うことで、子どもの様々な側面の発達を支援することができる。絵本の教育的意義については、様々述べられているが、大きく次の三つに集約できると考えられる。

一つ目は「言葉の理解や習得など言語能力を養うこと。」二つ目は「想像力や思考力・豊かな感性等を養うこと。」三つ目は「子どもの心の解放や、読み手や友達との一体感や安心感、心地よさを感じること。」である。

一つ目の「言葉の理解や習得など言語能力を養うこと。」については、子どもは絵本の読み聞かせを通して、読み手の言葉を聞きながら、絵を見ることで、絵本の内容を楽しみながら、自然に言語能力を養うことができる。また、松居（2001）[4]は読み聞かせを通して、子どもは絵本の絵を読んでいると著書の中で述べている。

松居によると「絵というのは､すべて言葉の世界」であり､「言葉にならない絵は」ないということである。

子どもは、耳から聞こえる言葉と絵本の中の絵を読んでいて、それが同時に進むことで、静止画のはずの絵が動きだし、物語が生き生きと子どもの中で進んでいくということを述べている。

絵本の中で記された文字から言葉を習得するというより、絵本の言葉を耳で聞き、絵を（頭の中で）言葉で読むことで二つの言葉の世界を読み取ることができる。そうして､絵本の世界に入り込み、自分の中に物語の世界をつくることができる。そういった、絵本の本質に触れるような、深く、楽しい経験により、子どもの言語能力を養うことができると言えるのである。

次に二つ目の「想像力や思考力・豊かな感性等を養うこと。」については、絵本にあるお話の世界に浸り、その主人公の気持ちになって共感したり、現実にはない世界を想像し膨らませたり、命や自然等いろいろなテーマに関して、心を揺さぶられる体験をすることで、想像力や思考力、豊かな感性等を養うことができると考えられる。

筆者は過去に幼稚園教諭の経験があり、実際の保育の中で、これらの力が育っていると感じた事例があった。それは、絵本の読み聞かせから生活発表会の劇遊びに繋がった、次のような事例である。

5歳児3学期の事例である。1月から少しずつ｢エルマーの冒険」と「じごくのそうべい」の読み聞かせを行い、子どもたちはこの2作品が大好きであった。生活発表会が目前に迫り、何を発表するか決める話し合いをしたところ、この2つの話を合わせて劇をするということに決まった。ここから子どもたちの想像力や思考力、そして創造力を大いに発揮して、劇遊びが始まった。自分たちでシナリオを考え、配役を決め、観ている人が楽しめるような演出を考えていった。もちろん配役を決める時は、なりたい役が重なって揉めたが、子どもたちが意見を出し合い、互いが納得できる方法で解決していったのである。

保育者である、私自身は子どもの力にただただ感心するばかりで、子どもと一緒に劇をつくる仲間として、子どもの思いに共感し、助けを求めてきたときは一緒に解決策を考え、援助していった。この活動の中で、子どもの想像力や思考力が育っていることを強く感じた。

さらに、楽しい時は思い切り楽しむ姿、分からないことはとことん調べたり考えたりする姿、困っている友達を気遣う優しい姿や互いに認め合い、喜び合う姿を目の当たりにし、豊かな感性が育っていると実感した。これらの育ちは、これまでの園生活全ての体験から子どもたちが得たものだと思うが、絵本の読み聞かせもその一役を担っていると感じられる事例であった。

また、保田（2015）[5]も絵本の読み聞かせ体験は教師や友達とお話の世界を間接的に体験しながら感動を共有し、人としての優しさや思いやりなどの豊かな想像力を育み、絵本の持つ力によって感性を豊かにすることができると述べている。

三つ目の「子どもの心の解放や、読み手や友達との一体感や安心感、心地よさを感じること。」に

ついては、絵本の読み聞かせは子どもとコミュニケーションをとる方法として有効であり、読み手（保護者や保育者）との温かい関わりによって、心が安定し、物語の世界に浸ることができる。そして、現実の世界を少し離れ、喜んだり悲しんだり、ワクワクしたりと様々な感情を抱き、読み終えたあと満足感や充実感を味わうことができる。また、友達と一緒に同じ物語を聞くことで、主人公の感情に共感しあったり、一緒にワクワクしたりすることでクラスの友達との一体感が生まれる。

このことは、幼稚園教諭時代に子どもたちに毎日読み聞かせを行っていた経験から実感していることである。こちらが読み始めると子どもたちは真剣な眼差しで絵本を見、私の言葉を聞き、笑顔になったり、悲しそうな表情をしたりして物語の世界に入り込んで楽しんでいる。読み手も含めてみんなで物語の世界を旅しているかのような感覚になり、何とも言えない一体感や安心感、充実感を得ることができた。本当に心地の良い時間であった。こういった時間は子どもが心を解放できる時間であり、元気や勇気をもらえる時間でもあると考えられ、読み聞かせの重要性を実感する。

これら三つの教育的意義と前述の「10の姿」を照らし合わせてみると、「(9) 言葉による伝え合い」において「先生（保育士等・保育教諭）や友達と心を通わせる中で、絵本や物語などに親しみながら、豊かな言葉や表現を身に付け、経験したことや考えたことなどを言葉で伝えたり、相手の話を注意して聞いたりし、言葉による伝え合いを楽しむようになる。」とある。「絵本」という言葉が直接登場し、「言葉による伝え合い」ができるように絵本という教材を積極的に活用するようにという意図が窺える。

また直接「絵本」という言葉が出てこないものでも、絵本を通して育てることができる姿がある。まず、「(3) 協同性と (4) 道徳性・規範意識の芽生え」である。直接体験ではなく、絵本のお話の中で、友達と力を合わせて物事に取り組み、達成することや、規範を守ること、思いやりの気持ちを持って生活することなど疑似体験を通してその大切さに気付き、実践しようとする意識を育てることができる。さらに、「(6) 思考力の芽生え」や「(7) 自然との関わり・生命尊重」、「(8) 数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚」などにおいても、絵本の内容を知ることで知識を得たり、絵本の内容が刺激になり、知的好奇心から探索活動を行ったりすることができる。反対に実際の体験から抱いた興味について、知的好奇心を働かせ、科学絵本等で確かめたり調べたりすることなどの行為を通して、上記の姿が育つと言える。このように今回の改定で取り込まれた「10の姿」を育てるために、絵本の教育的意義を踏まえると、絵本は非常に有効的な教材だと言える。

また新幼稚園教育要領[1]の領域「言葉」の１ねらいの（3）に「日常生活に必要な言葉が分かるようになるとともに、絵本や物語などに親しみ、言葉に対する感覚を豊かにし、先生や友達と心を通わせる」とある。２内容の（９）では「絵本や物語などに親しみ、興味をもって聞き、想像する楽しさを味わう」とある。そして、３内容の取扱いの（３）には「絵本や物語などで、その内容と自分の経験とを結び付けたり、想像を巡らせたりするなど、楽しみを十分味わうことによって、次第に豊かなイメージを持ち、言葉に対する感覚が養われるようにすること」、（４）では「幼児が生活の中で言葉の響きやリズム、新しい言葉や表現などに触れ、これらを使う楽しさを味わえるようにすること。その際、絵本や物語に親しんだり、言葉遊びなどをしたりすることを通して、言葉が豊かになるようにすること」とある。この幼稚園教育要領の内容からも、領域「言葉」のねらいや内容を達成することができるような絵本を用いた具体的な保育内容と保育方法の計画を立て、実践していくことが重要であることが分かる。

絵本を実践の中で取り入れられる保育者となるために、学生の内に絵本の教育的意義を実感を伴って理解し、絵本に関する知識や読み聞かせの技術を身に付けることが、重要である。

学生は実習前に絵本の知識や読み聞かせ方法について学び、実習を通して子どもたちに読み聞かせを行い、実践的に学んでいる。学内の授業において絵本についての学びを得るための授業実践研究（松尾 2016[6]、青木 2015[7]）や、学生の絵本に対する意識調査（松尾 2016[6]）はこれまでの研究でもみられるが、実習を通してどの程度学生が読み聞かせを行い、その中で何を学んでいるかということに関する調査はあまり見受けられない。実際学生は、絵本をそれほど重要な教材と感じることなく、保育室に置いてある絵本を、読む練習もしな

いまま子どもたちに読み聞かせをすることもあるようだ。折角の読み聞かせの機会を子どもの待ち時間をなくすための、時間つぶしのように扱って行う場合もある。そこで、学生自身が子どもの頃、どの程度読み聞かせてもらった経験があるのかなど、絵本に対する経験を調査し、その意識について考察することを一つ目の目的とする。

さらに、実際に保育実習Ｉでの読み聞かせ体験を調査し、絵本を選ぶ基準や、読み聞かせに対する学生の学びと課題について、考察することを二つ目の目的とする。

そして、上記の２つの調査を踏まえ、学生の実態に応じた「絵本の読み聞かせ」に関する指導内容を、検討することを三つ目の目的とする。

２．アンケート調査Ｉ

（１）方法

・質問内容：幼少期に、家庭と保育施設で絵本を読み聞かせてもらった体験の有無について問うた。読み聞かせてもらった体験が有る学生には、強く印象に残っている絵本があるかどうか知るために、タイトル(内容)を覚えている絵本があるかどうか尋ねた。
・時期：2016 年 5 月 31 日（保育実習Ｉ前の時期）
・対象者：保育学科１年生　８７名

（２）結果

家庭での絵本の読み聞かせ体験の結果と、覚えている絵本の有無についての結果を表１，図１，２に示す。保育施設での読み聞かせ体験の結果と覚えている絵本の有無についての結果を表２，図３，４に示す。

表１．家庭での読み聞かせ体験

	有	無（覚えていない）
家庭	53	34
覚えている絵本	28	25

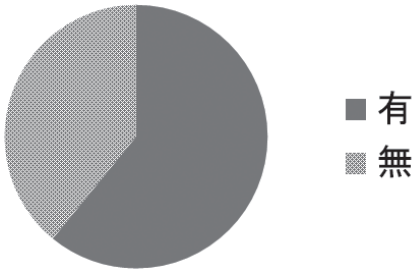

図１．家庭での体験

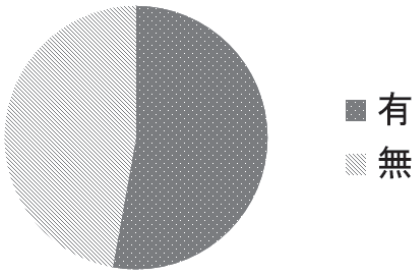

図２．覚えている絵本

表２．保育施設での読み聞かせ体験

	有	無（覚えていない）
保育施設	63	24
覚えている絵本	14	49

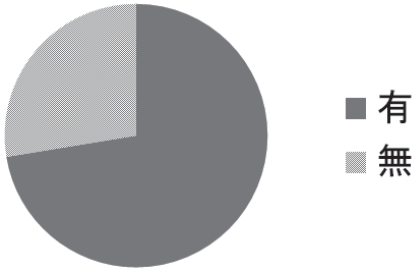

図３．保育施設での体験

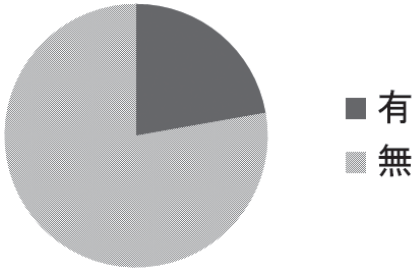

図４．覚えている絵本

家庭では、61％の学生が読み聞かせをしてもらっていることが分かった。その中で覚えている絵本がある学生は半数程度であった。

保育施設では 72％の学生が読み聞かせの体験があると回答し、その中で２割程度の学生が覚えている絵本があると回答した。

（３）考察

家庭で読み聞かせをしてもらった経験がある学生は 61％であった。約４割の学生は家庭で絵本を読み聞かせてもらったという経験が無い（記憶にない）とわかり、絵本を通した保護者など家族と

の関わりが少なかったということが推察された。また、読み聞かせてもらった経験がある学生の内、覚えている（記憶に残っている）絵本がある学生は半数程度、学生全体では３割程度しかいないということが分かった。

覚えている絵本がある学生からそのエピソードを尋ねると、読んでくれた人との温かい思い出を語ってくれ、その絵本が強く心に残っていることが分かった。

反対に、覚えている絵本が無い学生は、絵本の楽しさや良さに関する幼い頃の思い出については強く印象に残るものはなく、絵本を教育的意義の深いものであるという認識は薄いと推察された。

保育施設で、読み聞かせをしてもらった体験がある学生は72％となった。おそらく保育施設では、ほぼ毎日のように、絵本の読み聞かせを行っていると考えられるが、３割弱の学生はその体験も記憶には残っていないと考えられる。また、覚えている絵本があると回答した学生は22％と少ない結果となった。学生たちは、乳幼児の頃、保育施設で読み聞かせを通じて、様々な学びを得ていると思われるが、意識的にそのことを覚えている学生が少ないということが分かった。

絵本の良さや教育的意義を、あまり知らずに過ごしてきた学生が、多くいるということが分かり、事前指導の中で、読み聞かせの技術的な方法や、絵本の選び方だけでなく、読み聞かせが齎す良い影響を理解できるような、事前指導が重要であると考察された。

３．アンケート調査Ⅱ

（１）方法

・質問内容：保育実習Ⅰ（保育所）で絵本の読み聞かせを集団（クラス）または個別に行ったかどうかとその回数を問うた。それぞれについて絵本選択の理由と実践した感想を自由に記述するよう求めた。さらに実習後の絵本に関する興味の変化についても尋ねた。

・時期：2016年９月15日（保育実習終了直後の時期）

・対象者：保育実習Ⅰ（保育所）履修者（保育学科１年生等）89名

（２）結果

保育実習Ⅰ（保育所）で集団または個別で読み聞かせを行ったかどうかの結果を表３に示す。また、集団での体験を図５と個別での体験を図６のグラフに示す。

表3. 保育実習での読み聞かせ体験

	有	無
集団（クラス）	84	5
個別	66	23

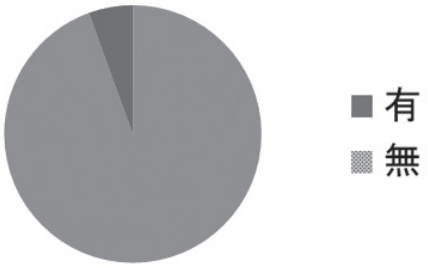

図５．集団での体験

図６．個別での体験

朝の集いや昼食前、午睡前や帰りの会などクラスの子どもが集まってお話を聞く時間に、子どもたちに対して絵本の読み聞かせを行った学生は、実習に参加した学生の94％であった。全員に近い学生が経験していることが分かった。

また、個別の子どもたちへの読み聞かせの体験は実習に参加した学生の74％であり、こちらの読み聞かせも多くの学生が体験できたことが分かった。

さらに集団での読み聞かせの回数を表４．図７に示す。

表４．集団での読み聞かせの回数

回数	0	１～２	３～４	５～６	７～８	９以上
人数	5	32	15	10	9	18

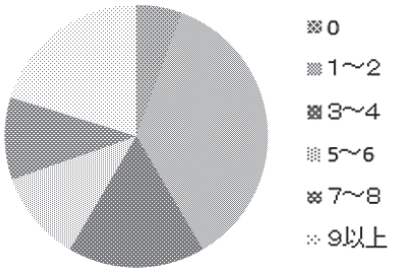

図７．集団での読み聞かせ回数

子どもたちの前で読み聞かせ体験を１～２回行った学生が35％と一番多かった。

次に多かったのは９回以上の学生で全体の20％程度となった。９回以上の学生は、ほぼ毎日、子どもたちの前で読み聞かせをする機会を得られたようだ。

毎日読むことで、子どもが見やすい読み方や見せ方が分かってきたという学生がいた。

次に個別に読み聞かせを行った回数を表５．図８に示す。

表５．個別での読み聞かせ回数

回数	0	1～2	3～4	5～6	7～8	9以上
人数	25	11	15	15	5	18

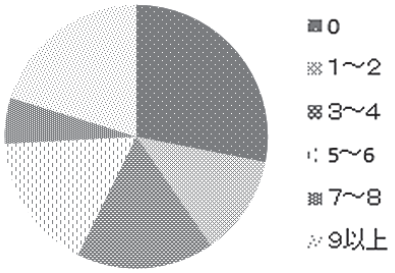

図８．個別での読み聞かせ回数

個別の子どもへの読み聞かせについては、一番多かったのは０回で、28％の学生であった。

次に多かったのは９回以上の20％の学生であった。

個別に読み聞かせを行った学生の回数にはばらつきがあった。

次に、読み聞かせで使用する絵本を選択した理由の結果について、表６．図９に示す。

表６．子どもたちへ読み聞かせる絵本の選択理由

①内容（面白そう･繰り返し･しかけ･絵がきれい等）	45
②発達に合ったもの	18
③自分が好きな本	17
④保育士の推薦	9
⑤季節や行事	7
⑥子どもが好きな本	5

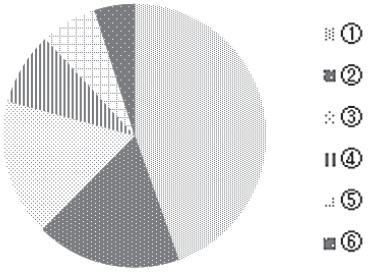

図９．絵本の選択理由

子どもたちに、読み聞かせる絵本を選択した理由として、多かったのは、面白そうであったり、繰り返しやしかけがあったりするものなど、その内容を見て、子どもたちが喜んでくれそうだと感じたものを選んでいる学生が半数近くであった。

次に多かったのは、絵本に書かれている対象年齢や、参考図書等で調べた対象年齢などを参考にして選んでいる学生が20％となった。次に自分が好きな絵本を選択した学生が19％と続いている。

さらに、実習クラス担当保育士が選ぶ場合や、行事や季節に合ったもの、子どもが普段の読み聞かせで好んでいる絵本の同じシリーズなどが少数あった。

次に、集団への絵本の読み聞かせを行った感想についての結果を表７、個別に読み聞かせを行った感想についての結果を表８に示す。

集団への読み聞かせを行った学生の67％が、子どもの反応の良さを感想で述べていた。

また、読み聞かせの時の座らせ方や絵本の持ち方、読み方などの難しさと絵本を読み始める時の難しさなど、読み聞かせに関する技術的な難しさを実感している学生は53％と半数以上いることが分かった。

表７．子どもたちに読み聞かせを行った学生の感想

子どもの反応が良かった（集中・真剣）	44
位置・見せ方の難しさ	19
読み方の難しさ	16
絵本を始める時の難しさ	12
子どもが興味を持つ内容を知れた	11

表８．個別で読み聞かせを行った学生の感想

コミュニケーションを図りながら関われた	21
子どものペースに合わせることの難しさ	13
絵本を個別に読んでほしい子が多い	10
膝にのせて読むなど関わりが深まった	10
少人数なので落ち着いて読めた	6

個別での読み聞かせに関しては、「コミュニケーションを図りながら関われた」や「膝にのせて読むなど関わりが深まった」など、子どもとの関係が深まるものであるということを、感じている学生が52％と半数近くいた。また「絵本を個別に読んでほしい子が多い」と絵本を通じて個別の関係を求めている子どもがいると感じている学生が15％いた。他には「子どものペースに合わせることの難しさ」を感想に書いている学生も15％いた。

最後に実習を通して絵本に興味が持てたかどうか、１、今までと変わりない　２、どちらでもない　３、より興味が強くなった　と３件法で尋ねたところ、より興味が強くなったと回答した学生は64名（72％）となった。また、今までと変わりないと解答した学生は９名で、どちらでもないと回答した学生は16名であった。

（３）考察

ここではクラス集団への読み聞かせ体験と、個別への読み聞かせ体験とに分けて考察する。

まず、読み聞かせを行った結果は、クラス集団への読み聞かせでは、94％と全員に近い人数となった。

初めての保育実習で、子どもたちの前で話をするという部分実習の第一段階として経験させてもらったようである。

その回数は１～２回行った学生が35％と一番多く、本格的に部分実習を行う前の練習という意味合いがあると思われる。また、次に多いのが、９回以上の学生で20％となった。こちらの学生はほぼ毎日、絵本の読み聞かせを行い、学生の感想から、日を追うごとに絵本の持ち方や見せ方などの読み聞かせの技術が、上達していったと感じたようであった。子どもたちの前で話をする練習として、絵本の読み聞かせは割合、容易く実践させてもらえる機会であるようだ。絵本は文章が短く平易で、読むことは難しくはない。また、子どもたちは大概、集中して絵本を聞いてくれるので、初めて子どもたちの前に立って話をする学生でも、扱いやすい保育教材と言える。それだから適当に絵本を選び、読む練習もせず、読み聞かせることもあると思われる。そうではなく、子どもが楽しめる教材であるからこそ、絵本の教育的意義を深く理解した上で、取り組んでもらいたいと思う。

絵本を選択した理由に関しては、自分が面白そうと感じ、子どもが喜んでくれることを想像して、選んでいる学生が半数以上であった。また、実習前の授業の中で、発達段階を考えて絵本を選ぶことを学んでいるため、絵本の後ろなどに「○歳児から」などと書かれているものを参考にし、選択している学生が次に多かった。実際、子どもたちが絵本を聞く姿から、発達に合っている絵本を選択することの重要性を理解している学生もいた。自分の好きな絵本を選択する学生が次に多かったが、自分の好きな絵本は思い入れがあり、その絵本の面白さや感動を子どもたちにも味わって欲しいと思い、読み聞かせをしていたようだった。自分が熟知している絵本なので、読み方も工夫でき、学生自身の思いが子どもたちにも伝わっているようであった。

読み聞かせをした感想では、学生が読み聞かせをすると、子どもたちが食い入るように絵本に集中するようで、子どもが熱心に聞いてくれて嬉しかったと感想を述べる学生が多かった。子どもたちと絵本の世界に入り、一緒にその内容に共感し、一体感を感じている学生が多く、絵本の読み聞かせの齎す良い影響について実感を伴って、学んでいるようであった。

また、実際読み聞かせをすることで、全員の子どもが見やすいように、持ち方や座り方を工夫することや絵本の読み方、間の取り方や声の出し方など技術的な面での難しさを感じている学生が多かった。このことは実習前の授業の中で実践的に学ぶ必要があると思われた。

次に個別の子どもたちへの読み聞かせであるが、１回でも経験した学生は全体の72％の学生であり、

そのほとんどが、子どもが選んだ本を読み聞かせていることが分かった。個別に関わることで、子どもとのコミュニケーションが取れ、膝に乗せたり、何度も同じページを読んだりして、深い関わりが持てたと感じている学生が多かった。絵本の読み聞かせを通して、一人や数人の子どもと関わることで、気持ちが通じ合い、その後の実習においても、安心して関わってくれるようになったと感想を述べている学生もいた。反対にそういった温かい関わりを求めている子がいて、実習生の取り合いになることもあったようだが、じっくり丁寧に関わり、子どもとの信頼関係を築くことができる媒体として絵本が非常に有効であることを実感していた。

最後に実習での読み聞かせ体験を通して、絵本に対する興味が持てたかどうか尋ねたところ、72%の学生は興味が強くなったと回答した。

今まで、絵本の読み聞かせが齎す良い影響について理解していなかった学生が、実際に読み聞かせを体験し、子どもたちが真剣な眼差しで、熱心に聞き、楽しみながら言葉を理解し、想像力や思考力を養う姿を目の当たりにして、絵本に対する興味が強まったということが言える。

4．まとめと今後の課題

新幼稚園教育要領[1]、新保育所保育指針[2]、新幼保連携型認定こども園教育・保育要領[3]に共通に記載されている、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を育てるために、絵本は非常に有効な児童文化財である。

絵本を効果的に保育の中で活用し実践していけるように、保育を目指す学生に対してどのような指導が必要であるか、本研究のアンケート調査Ⅰとアンケート調査Ⅱの結果と考察から検討すると、次の４つの点が浮かび上がってきた。

まず一つ目は絵本の魅力を深く味わう体験をすることである。幼少期の絵本の読み聞かせ体験を、覚えていない学生にとって、絵本を通した、楽しく温かい思い出のようなものがなく、幼少期に絵本の読み聞かせをすることの意義を、理解していない学生が多いことが分かった。

まずは、絵本の面白さやその魅力を、学生自身が感じ、味わうことが重要だと考えられる。柳田（2001）[8]は絵本は人生に三度読むべきだと述べている。まずは自分が子どもの時、次に子育ての時、そして人生の後半に入った時の三度であり、「絵本の中には生きていく上で一番大事なものは何かといったことがすでに書かれている」と述べている。大人になってから絵本を読むと、人生の様々な場面で、絵本の中の事柄を新しく発見する、という深い読み取りをすることがあり、それが人生を意味づけたり、自分のことを受け入れられたりする、というのである。このように絵本には、深い意味や味わいがあるものが多くある、ということを、子どもたちに読み聞かせを行う保育者になる学生には理解してほしいと思う。それは知識としての理解ではなく、絵本を通した、心を揺さぶられる体験を通して、感じてもらいたい。そのような体験ができるよう、養成校の教員は、学内の授業の中で、指導法を工夫することが重要である。

絵本についての実習事前指導を行った後、ある学生が「絵本がこんなに面白いものだとは知らなかった。もっと絵本を知りたくなった」と話してくれた。こういう思いを、全員の学生がもてるような授業を模索していきたい。

二つ目は絵本の知識を得るということである。絵本には様々な種類（ジャンル）がある。児童文化のテキスト（小川 2010）[9]には以下のように９つに分類されている。①赤ちゃん絵本　②創作・物語絵本　③昔話・民話絵本　④知識絵本（科学絵本・図鑑絵本・数の絵本）　⑤言葉の絵本　⑥写真絵本　⑦文字のない絵本　⑧しかけ絵本　⑨バリアフリー絵本

これらについて、まずは知ることが大切である。それぞれに良さがや教育的意義があり、各種類の絵本をじっくり読んで味わいながら、子どもに感じてほしいことや、伝えたいことなどを考えながら、教材研究をすることが重要である。

しかし、工藤（2016）[10]が指摘しているように、学生の絵本を読解する力は年々低下してきている。絵本は簡単な言葉と絵で構成されているから、大学生なら、理解できるように思われるが、言葉と言葉の行間の意味や、絵の中の言葉を読むということが難しいと思われる。また、都市化や核家族化がもたらした、様々な実体験の少なさから、絵本の世界が理解できず、共感もできない学生がいる。そこで、授業の中で、一冊の絵本を教員が読み聞かせ、感想を語り合う中で、いろいろな見方

や感じ方があることを知るとともに、その絵本の内容や絵本から読み取れる意図を導き出すという作業が必要である。

さらに絵本の内容や構成から、子どもの発達段階に応じた内容をとらえ、読み聞かせる絵本を、選択する能力も必要である。子どもの、言葉に対する発達過程だけでなく、身体や内面の発達過程も踏まえ、季節や行事、子どもの状態なども考慮に入れながら、適切な絵本を選択できる力を養うことが重要である。

三つ目には読み聞かせの技術を身に付けることである。実際、実習の場で読み聞かせを行い、持ち方、座らせ方や読み方など技術的な未熟さから、うまく読み聞かせができなかったと感じている学生が多かった。

読み聞かせの技術については、実際の保育室を想定し、学生が保育者役と子ども役になって、読み聞かせを体験するという、模擬保育を行うことが有効であると考えられる。保育者側の視点だけでなく、子ども側の視点で、読み聞かせてもらうことで、絵本を持つ手の位置や向き、絵の大きさなど、様々なことに気付くことができる。絵本が見えにくいと、集中して聞けないし、楽しめないということが分かり、実践の場で、子どもの立場に立って、見やすい見せ方を工夫することができるであろう。

また、読み方について、声の出し方や抑揚の付け方、役によって声色を変えるなど、様々な方法がある。登場人物になりきって、分かりやすく演じるように読むほうが良い、という考えや、できるだけ抑揚をつけずに読み、子どもが絵を見ながら自分のイメージを広げて、絵本の世界を楽しめるようにするのが良い、という考えなど、いろいろな意見がある。どちらが良いというのではなく、学生自身が一番読みやすく、子どもに伝わりやすいと感じる読み方を、模索することが重要である。読み方には個性があり、それが魅力となって子どもを惹きつけるという場面をみるので、子どもたちが絵本の世界を存分に楽しめるような、自分らしい読み方を、探求してほしいと考える。

最後に、子どもたちと絵本を共に楽しむ感性をもつ、ということである。絵本が活動の起点となり、遊びが展開することがよくある。その時に子どもの疑問や不思議に寄り添い、子どもの知りたい、取り組みたいという思いに共感する。そして、子どもの思いが実現していくように一緒に考え、援助していくことで、絵本の世界がどんどん広がり、子どもたちにとって、大きな学びのチャンスになる。そういうことを、楽しみながら、子どもと共に活動できる感性をもってほしい。そのためには、授業の中で絵本から始まった活動の事例研究や、絵本からどんな遊びが展開できるかを考える、教材研究などを行うことが重要である。このような取り組みを実践することで、先述の「10の姿」を育てることに繋がる保育実践ができると思われる。

今後の課題としては、2年間という限られた養成期間の授業の中で、ここに導き出した、絵本に関する指導内容を、どのように具体的に実践してくかを考えることである。児童文化や保育内容、実習指導の授業担当者が、相互に授業内容を相談し、協同で実践していくことが必要だと考えられる。

【引用文献】

1）幼稚園教育要領　文部科学省　平成29年
2）保育所保育指針　厚生労働省　平成29年
3）幼保連携型認定こども園教育・保育要領　内閣府文部科学省　厚生労働省　平成29年
4）松居直　河合隼雄　柳田邦男（2001）絵本の力　岩波書店　P53 - 54
5）保田恵莉（2015）保育者のまなざし（3）乳幼児の心を育む絵本研究　―創作絵本を通した読み聞かせから―　幼年児童教育研究　第27号　P1-12
6）松尾裕美　（2016）　保育者を目指す学生の絵本への認識　福岡女子短期大学紀要　81巻　P1-8
7）青木文美（2015）「心に残る絵本」の発表に見る絵本の捉え方変容過程を追う：絵本の選択力育成に関する一考察　愛知淑徳大学論集　―福祉貢献学部篇―　第5部　P1-14
8）1）と同上　P87
9）小川清美編　森下みさ子　内藤和美　河野優子　小林由利子　（2010）児童文化　保育内容としての実践と展開　萌文書林　P69-71
10）工藤真由美（2016）保育者にとっての絵本に関する一考察　四條畷学園短期大学紀要　第49号　P40-46

【参考文献】

・福岡貞子　礒澤淳子　編　著者他24名（2009）　保育者と学生・親のための乳児の絵本・保育課題絵本ガイド　ミネルヴァ書房
・真下知子（2014）理論と実践のつながりを重視した「教育方法論」の取り組み - 保育における三方向コミュニ

ケーションの学習を通して - 日本教育情報学会　第30回年会論集　P62-63
・松本峰雄　編　高橋司　飯塚朝子　佐々木由美子　関根久美　浅井広（2014）　演習課題＆型紙＆下絵付き　保育における子ども文化　わかば書房
・梨本竜子（2016）絵本から学ぶ保育者論　－授業実践報告－　新潟青陵大学短期大学部研究報告　第46号　P121-129

付記

本稿はその一部を「第70回日本保育学会」（平成29年5月20日会場・川崎学園川崎医療福祉大学）にて、『保育を学ぶ学生の絵本に対する意識の変容―読み聞かせ体験の実態調査より―』と題し、ポスター発表している。

－ 2017. 10. 3 受稿、2017. 10. 4 受理 －